

大学教育の向上を 支援する仕組みの構築

2011年11月14日
山田礼子(同志社大学)

これまでの議論をふまえて

- 金子先生 = 学生の問題はあるが、個別の工夫は進展。しかし構造的な問題は残る
教育のガバナンスの不在
- 吉田先生 = 教授の問題と学習の問題 大学を動かすための外部からの仕掛け(支援や評価)の構築
- 濱名先生 = 大学によるガバナンスの多様性
学士力を例示として教養と専門的内容のバランスをどうとるか

学生側から見た教育効果の検証は？

- 継続データを参照すると、様々な教育方法の導入や個別の努力の効果はゆっくりではあるが、着実に進捗している
- 週当たり授業コマ数は改善しているが、学習時間は増加していない
- GPによる新たなプログラム、初年次教育の効果、アクティブ・ラーニング等新たな教育内容・方法による効果は少しずつではあるが、学生も実感しつつある

2

データについて

CSS2005(男性11,367人,女性18,821人)(UCLA HERIによる標準的調査)

調査対象 米国の4年制大学に在学している3年から4年になる学生30188人

JCSS2007調査対象 国公立大学16校 6228名 調査時期2007年12月～08年1月

国立 5校 1549人 公立 2校 2596人 私立 7校 1734人 短期大学2校 349人

JCSS2010(日本版大学生調査、CSSと互換性がある)(JFS新入生調査、JCSS大学生調査

JCSS短期大学生調査の3種類からなるJCIRPのひとつ。2004年から開始した継続調査、

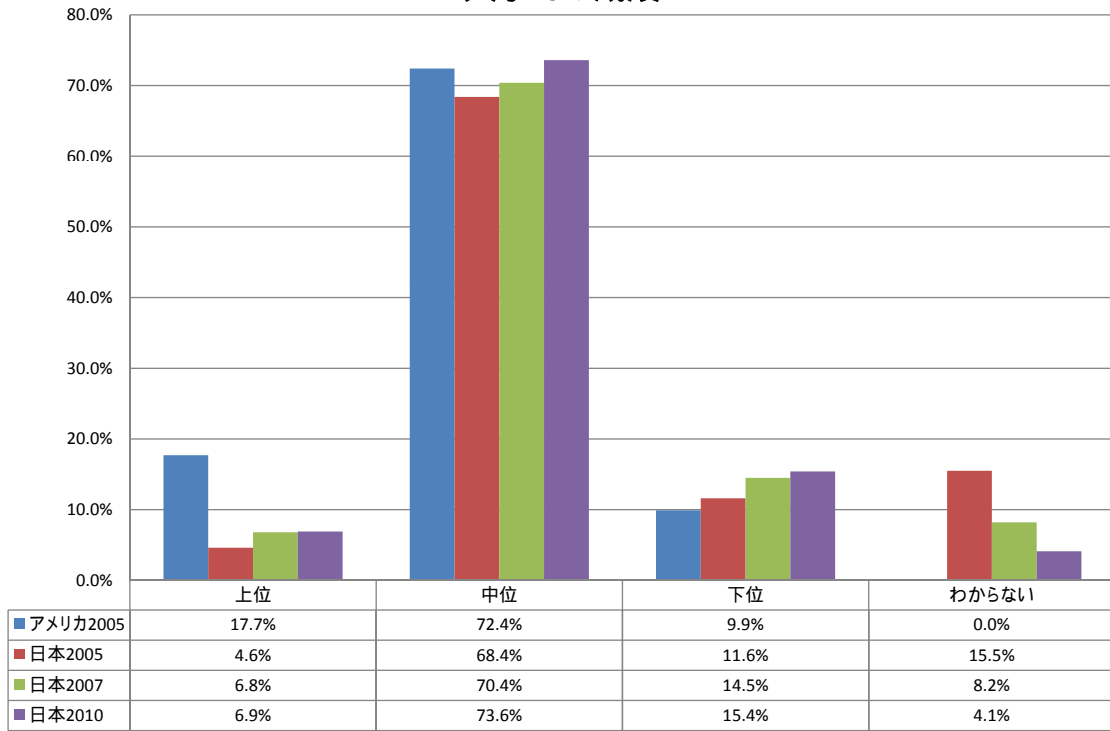
2011年現在で90000人以上の大学生、短期大学生のデータが蓄積され、国際比較が可能)

調査対象 国公立大学71校8300名 調査時期 2010年10月～12月

設置形態	度数	比率	専攻分野	度数	比率	性別	度数	比率	高校成績	度数	比率
国立	2058	24.8	人文	1434	17.3	男性	3527	42.5	上位の方	1419	17.1
公立	424	5.1	社会	1688	20.4	女性	4630	55.8	中の上くらい	2193	26.4
私立	5691	68.6	理工農生	1545	18.6	無回答	143	1.7	中くらい	2369	28.5
無回答	127	1.5	医療	1651	19.9		8300	100	中の下くらい	1220	14.7
	8300	100	家政学	193	2.3				下位の方	876	10.6
			教育	618	7.4				その他	167	2.0
			芸術	283	3.4				無回答	56	.7
			その他	770	9.3					8300	100
			無回答	118	1.4						
				8300	100						

3

大学での成績

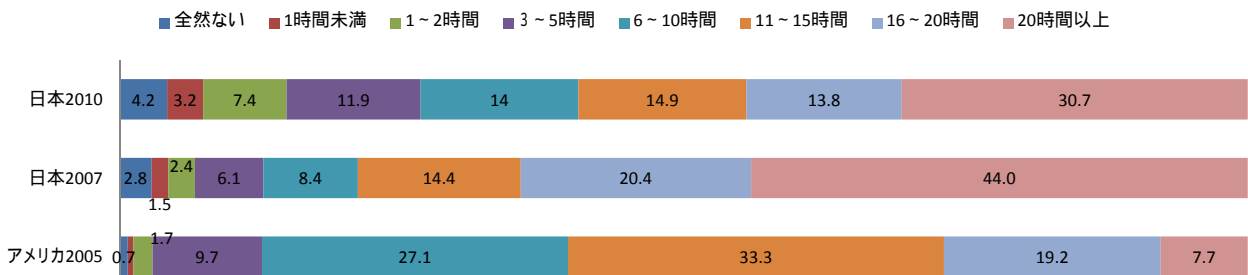


日本における成績の厳格化は進展、逆に米国は成績インフレか？
「わからない」と答える学生が年々減少 GPA効果？

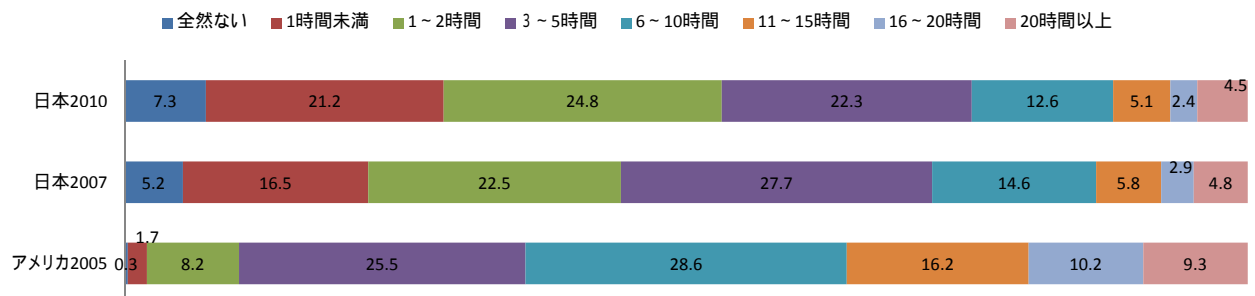
4

単位の实质化に大きな課題がある日本の大学？

授業や実験への1週間あたり出席時間 (%)

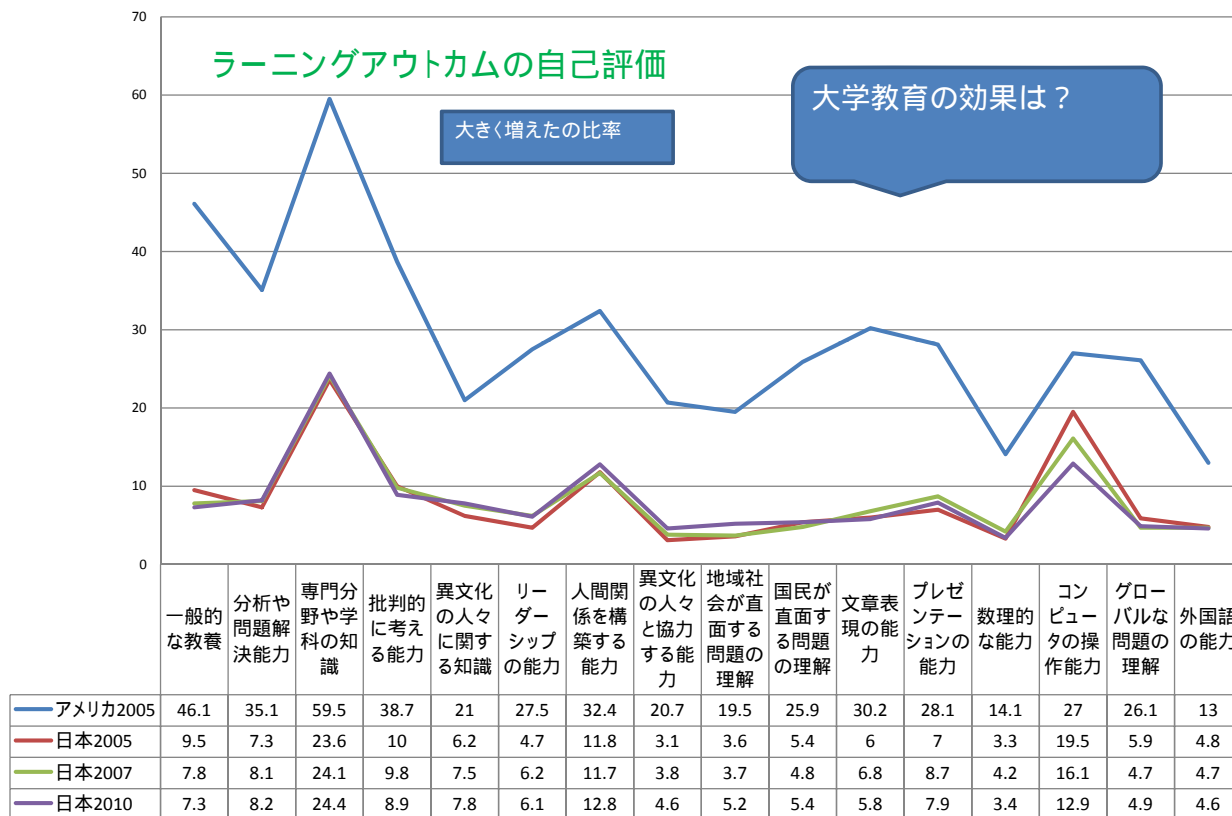


授業時間以外の1週間の勉強や宿題時間 (%)



授業や実験への出席時間の多い日本の学生 継続データでは大幅に改善
授業時間以外の勉強時間の短い日本の学生 継続データでも増加していないむしろ減少

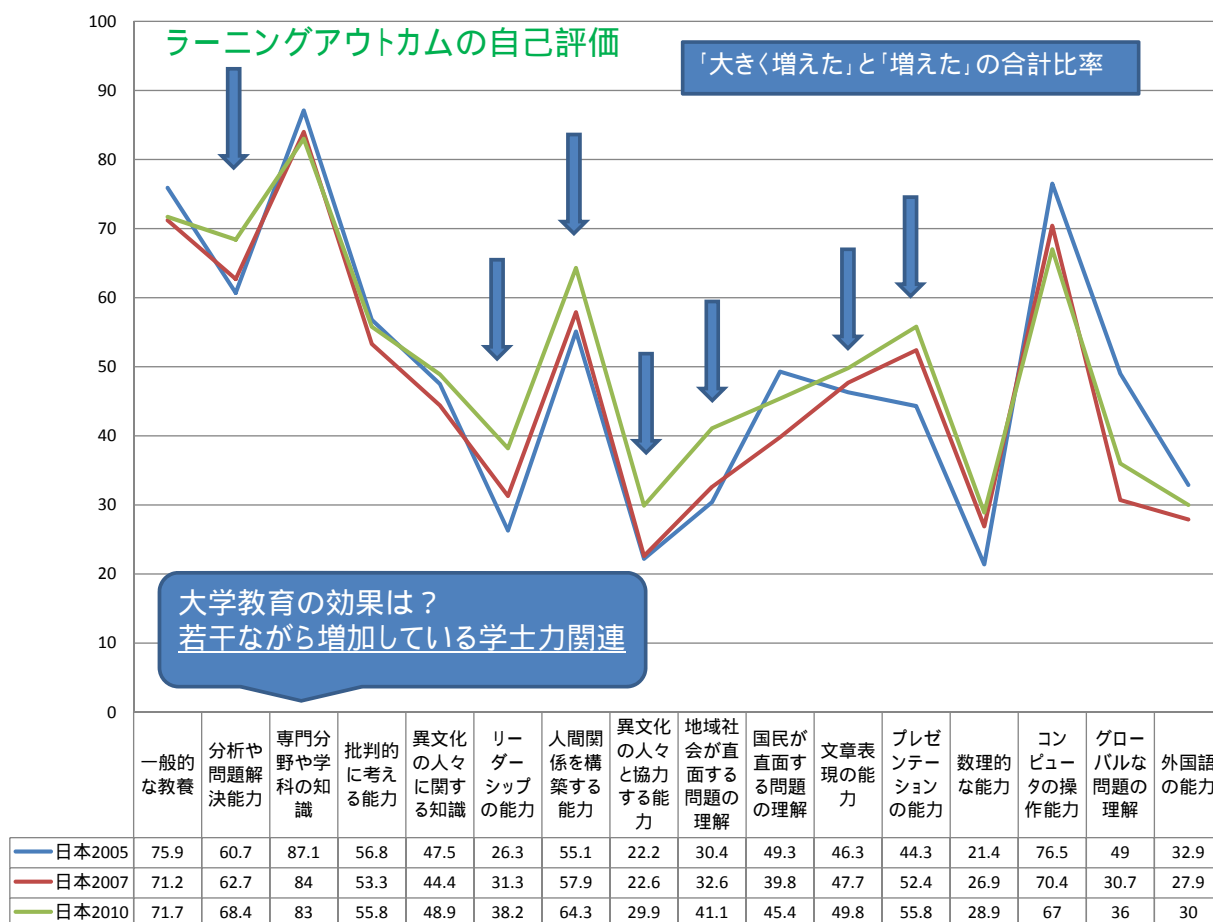
5



継続的データでそれほど変化のない日本の学生のラーニング・アウトカムの自己評価

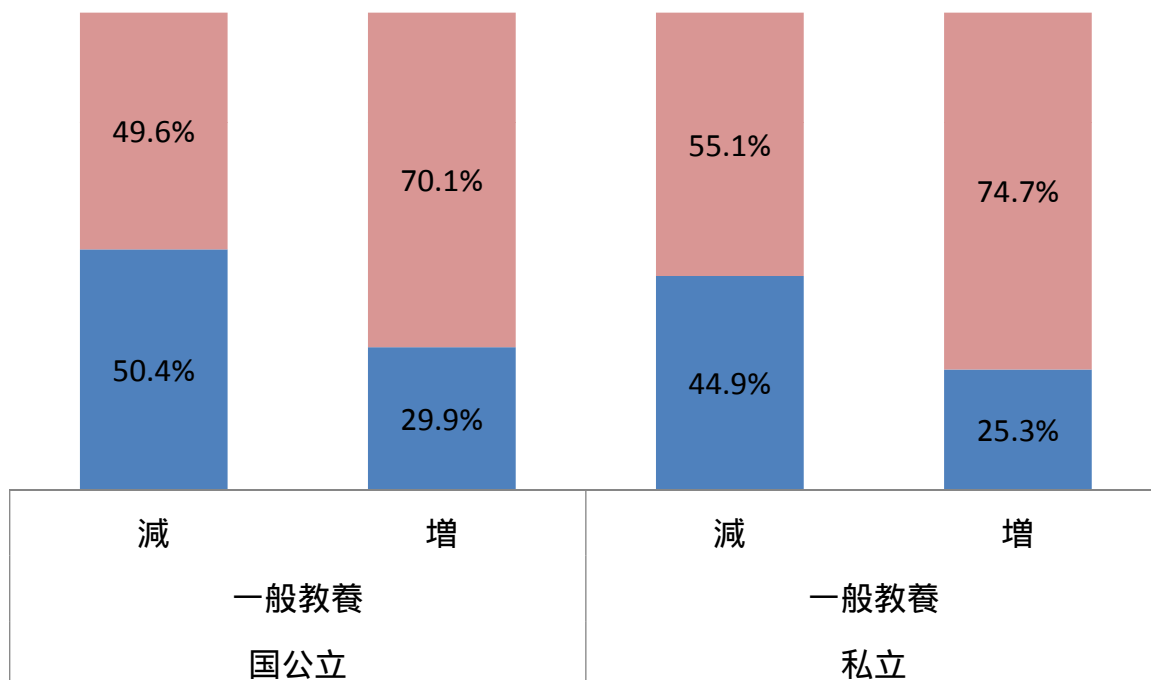
サンプル大学は異なるけれども一般化できるデータとしての意味？

自己評価の低い傾向のある日本の学生，高い傾向のあるアメリカの学生 どれくらいが適正水準か？ 6



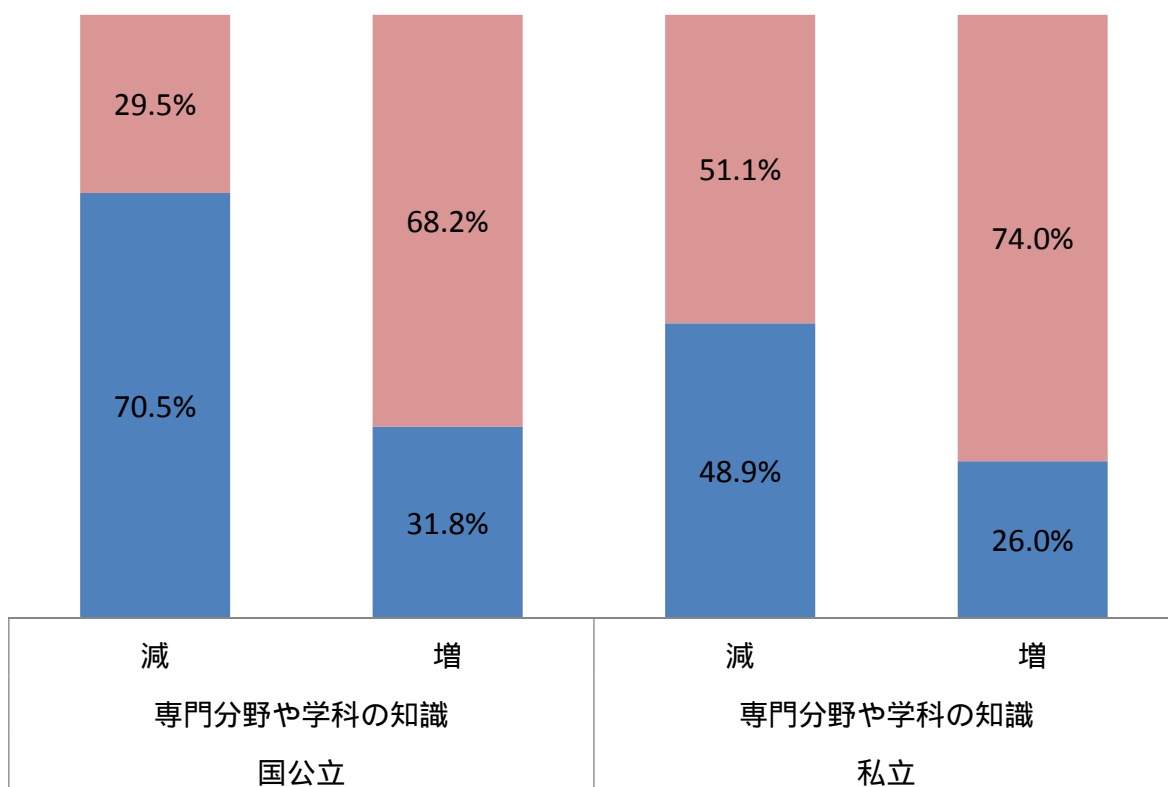
教育の成果と教育の工夫との関係は？

- 授業における学習経験：学生が自分の考えや研究を発表する なし
- 授業における学習経験：学生が自分の考えや研究を発表する あり



8

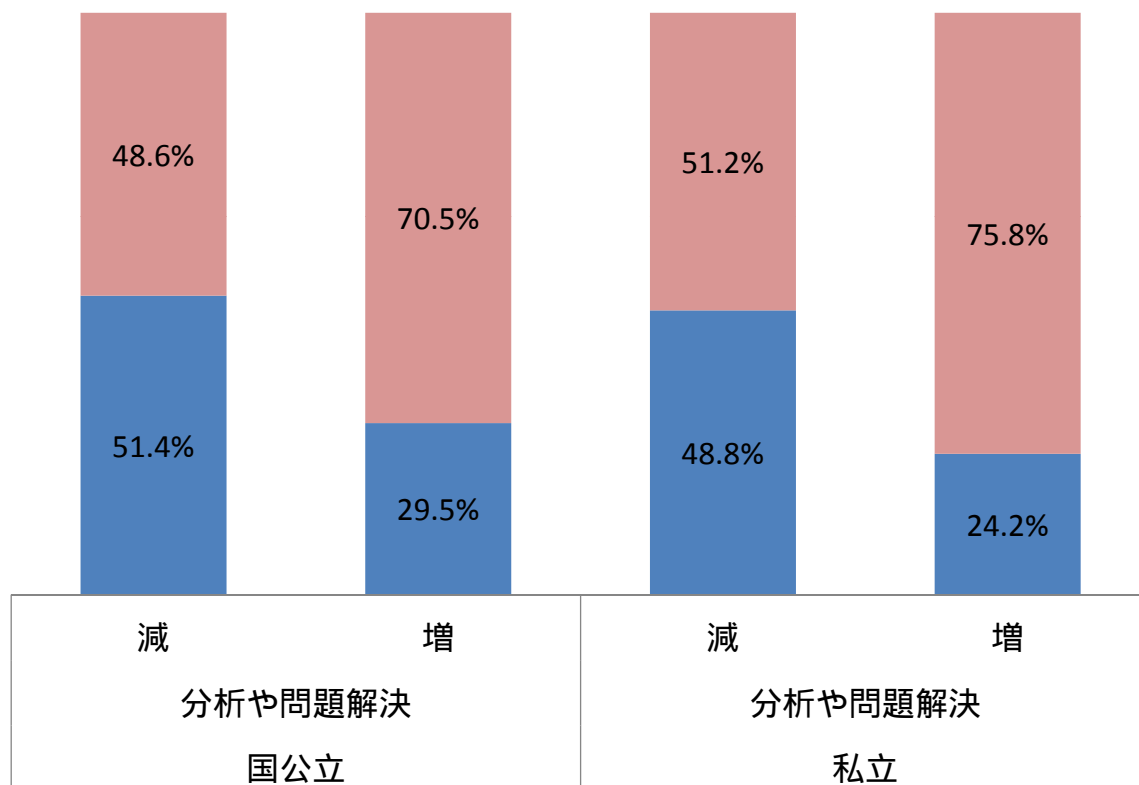
- 授業における学習経験：学生が自分の考えや研究を発表する なし
- 授業における学習経験：学生が自分の考えや研究を発表する あり



9

■ 授業における学習経験：学生が自分の考えや研究を発表する なし

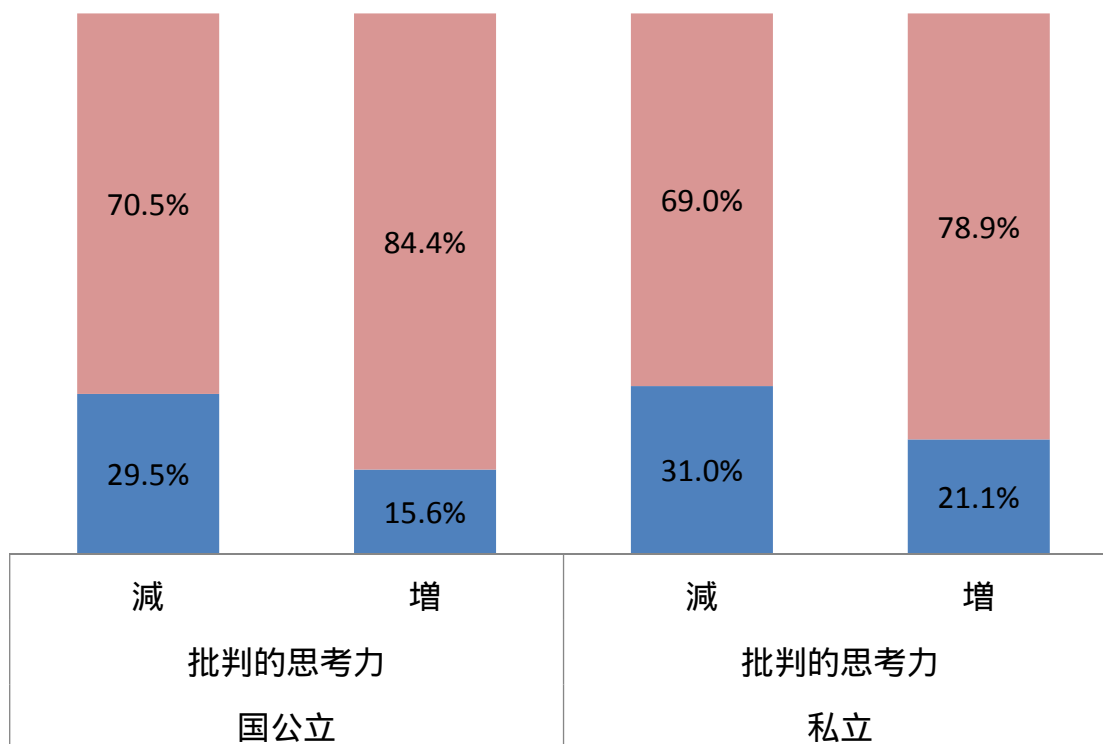
■ 授業における学習経験：学生が自分の考えや研究を発表する あり



10

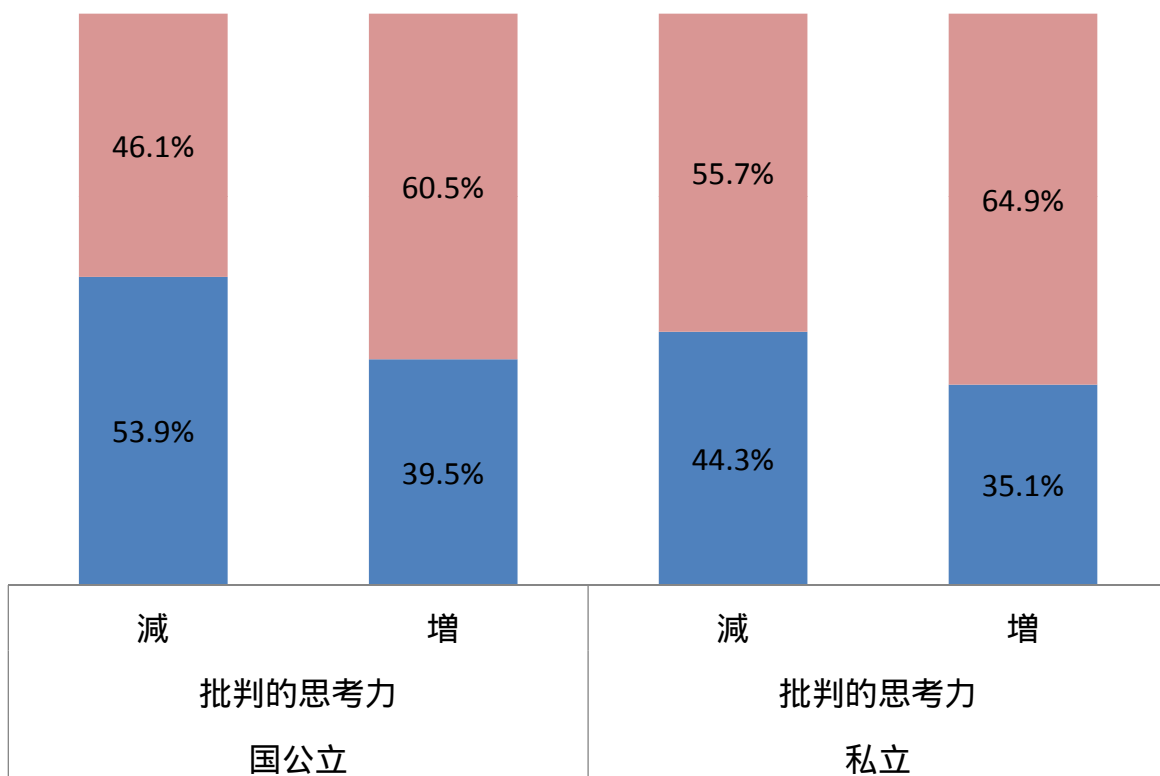
■ 授業における学習経験：学生自身が文献や資料を調べる なし

■ 授業における学習経験：学生自身が文献や資料を調べる あり

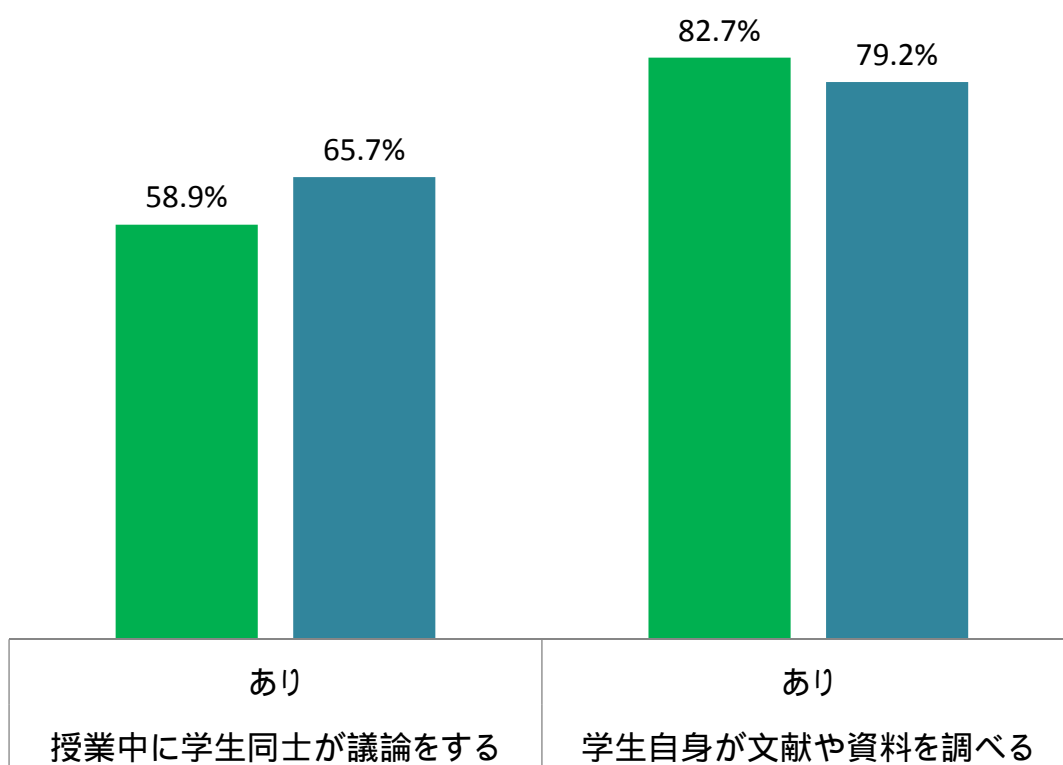


11

- 授業における学習経験：授業中に学生同士が議論をする なし
- 授業における学習経験：授業中に学生同士が議論をする あり



- 国公立 コミュニケーション力 増
- 私立 コミュニケーション力 増



近年の教育改革の効果は？

進捗してきたこと

- 初年次教育はプログラムとして機能
- アクティブ・ラーニングは取り入れられつつある
- 授業やプログラムを通じて学生は徐々に成果を実感している

解決されていない根本問題

- 大学全体として学生の学習成果は把握されていない
- 初年次教育プログラムの効果が、専門教育、共通教育へと継承されていない
- 個別な努力であって、組織的なガバナンスには結びついていない

14

教育の質保証： 第一ステージから第二ステージへ

- ▶ 第一ステージ：シラバス、GPA制度、CAP制、学生調査等を導入してきた今までの各大学の取組
- ▶ 第二ステージ：IR機能の充実、IRを活用した評価、その評価結果を単位の実質化、学生の学習時間の確保に結びつける教育環境の整備の段階



- ▶ 第三ステージ：データの分析結果と評価から学生教育への還元

15

教学ガバナンスの支援としてのIR

- ▶ 米国で登場したIR (Institutional Research) は、(1) 機関の業績(成果)についてのデータ収集、(2) 機関の環境についてのデータ収集、(3) 収集したデータの分析と解釈、(4) データ(資料)分析と解釈、機関計画策定、(5) 政策策定と意思決定支援情報への変換と定義され(マッセン)、
(A) 報告業務と政策分析、(B) 計画策定、エンrollment・マネジメント、財務管理、(C) 質保証、学習成果アセスメント、プログラムの検討、効果測定、アクレディテーション対応という3つの領域での活動をおこなってきた。



(C)を日本で教学IRとして教育ガバナンスの支援の仕組みとして機能させるには

16

大学間連携による教学IRの意味は？

- 金子先生→教育のガバナンスの不在
- 吉田先生→大学を動かすための外部からの仕掛け(支援や評価)の構築
- 濱名先生→大学によるガバナンスの多様性



大学の個別性を考慮しつつ標準性を活用
することで大学間連携教学IRの仕組みの構築

17

アウトカム・アセスメントの方法

直接評価 = 学習成果の評価
内容 = 科目試験, レポート, プロジェクト, ポートフォリオ, 卒業試験, 卒業研究や卒業論文, 標準試験
分野 = 一般教育, 専門分野別
具体的指標 = GPA, テスト得点



間接評価 = 学習プロセスの評価
= 学習行動, 生活行動, 自己認識, 大学の教育プログラムへの満足度等成果にいたるまでの過程
内容 = 自己評価による学生調査
時期 = 入学時, 1年次終了時, 上級学年時, 卒業後
具体的指標 = 信頼性・妥当性の高い質問項目

直接評価と間接評価の組み合わせ

標準性の検証

個別性による特色の充実

18

連携大学間における IRネットワークシステムの構築

- ▶ 学生調査結果を自動化する分析システムを開発
- ▶ 連携4大学では異なる業務データや教務データを保持しているが、そのデータを使いIRシステムの分析などを行うことで、相互評価を行えるようなシステムを開発

直接評価と間接評価の連結による評価



参加大学の分析負担を軽減

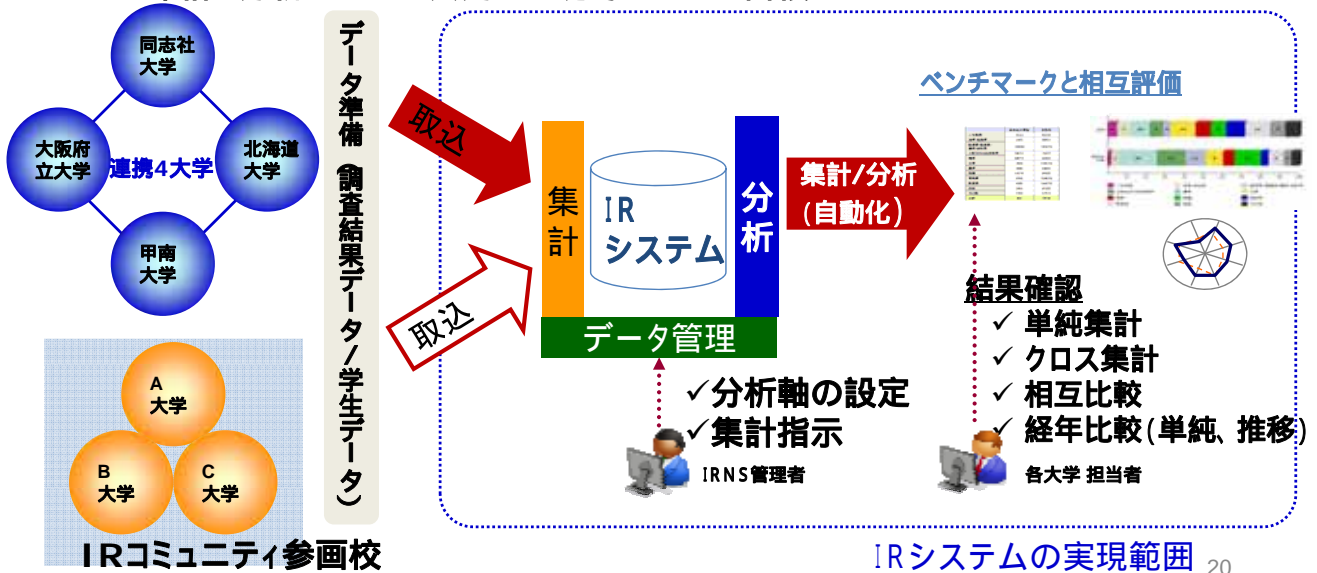
自大学のデータとも連結可能

情報セキュリティの確保 匿名化ツールの開発

19

複数大学の調査結果を集計・分析し、レポートを自動生成

- 共通調査のために収集された匿名化調査結果データや匿名化学生データの取込
- IRシステムに取り込んだ各データの集計、設定に応じたデータ分析
- データ分析結果(共通指標)の表示、相互評価結果の表示
- 集計/分析データの共用と基礎的データの蓄積



IRシステムの利用イメージ

参加大学は、「データ準備 / 登録」と「集計結果の閲覧」をするだけ

データ準備 / 登録

- 共通調査の実施
- 共通調査結果の収集
- 共通調査結果データの整形 (匿名化、登録フォーマット)
- 学生データの準備
- 学生データの整形 (匿名化、登録フォーマット)
- システムへのデータ登録 (専用画面でアップロード)

IRNSによる集計処理

- 参加大学のデータ収集
- 集計 / 分析軸の設定
- 収集データの集計 (各校、全体等の集計単位)
- 集計結果の公開

集計結果の閲覧

- 集計結果の検索 / 閲覧
- 個別集計
- (単純集計、クロス集計、ドリルダウン、相互比較)
- 経年比較 (単純比較、推移比較)
- 集計結果のデータ出力 (専用画面でダウンロード)
- 個別分析 (ダウンロードデータの利用)

赤字部分はIRシステムで実現する部分。

IRネットワークを活用した相互評価とベンチマーキング

- ▶ 学生調査結果分析を4大学間で比較検討、傾向や対策を相互評価→教育の質保証の向上と指標の設定
- ▶ 北海道大学 単位の実質化や学習時間確保の実績
- ▶ 大阪府立大学 策定中のラーニング・アウトカム
を参照しながら



ベンチマークから相互評価方法の模索と確立

22

学生教育への還元と 全国規模の大学IRコミュニティ育成

- ▶ 学生教育への還元 共通性の高い「英語」の教育成果を測定し、連携大学が提供する英語科目の共通の到達目標の設定（甲南大学が中心）
- ▶ IRコミュニティ = 客観的なデータに基づいた現状評価文化を高等教育機関全体に普及、広げること
ネットワークを通じて、データ分析を容易にできるシステムを利用、分析できる人材を育成

23

効果的な機能とは？

- ・連携により個別大学内だけでは進められない組織的な教育改善への客観的・標準的データの提供
- ・その方法として、類似大学機関、分野別のベンチマークを実施
- ・ベンチマークを参照しながら、各大学の個別性と特色性を充実

直面する課題

- ・教学データはだれのもの？
大学所属ではない学部・学科・専攻に所属
- ・ベンチマークをポジティブに受け止めない
外に出したまらない閉鎖性

参考資料

• JCIRP関連

http://rc-jcirp.doshisha.ac.jp/kaken/pdf/2010_10_22.pdf

<http://rc-jcirp.doshisha.ac.jp/kaken/kstudy/index.php>

<http://rc-jcirp.doshisha.ac.jp/content/index.php>

・4大学連携教学IR関連

<http://www.irnw.jp/index.html>